

漢訳大蔵経の恩恵

教授 織田 顕祐
(仏教学 東アジア仏教思想史の研究)

経典に触れ得る奇跡

親鸞は、自分が大乘仏教に触れ得た感動を「西蕃・月氏の聖典、東夏・日域の師釈遇いがたくして今遇うことを得たり。聞きがたくしてすでに聞くことを得たり」と述べている。仏教は、インドに始まり中央アジアから中国を経て朝鮮半島から我が国に伝来した。そして、経典は原典から漢訳されることによって東アジアの宗教・文化の基盤となったのである。途方も無い距離と延々とした営為の末に、私たちはこの日本で仏教に触れ得たのである。私は、1973年に仏教学科に入学した。大学に入学して戸惑うことは多かったが、仏教学科の入学であるから直接経典に触れることは至極当然のように感じていた。しかし、今改めて思うに、こうした学問姿勢は当然のことではなかったのである。今、東アジアのほとんどの地域で仏教が学ばれているが、経典と自分との対話のようにして仏教を学ぶような学び方は皆無と言っていい。

仏教の視点から見れば、人間は本来自己自身に閉塞していくような構造を持っている。それ故、それを外部との対話によって開放していく必要がある。ちょうど、鏡によらなければ自分の顔さえも見るができないようなものである。時代社会がどのように変化しようとも、この一点だけは決して変わることがないであろう。そこに本学の根本的な使命がある。



大蔵経の意義

長い時間をかけて膨大な経典が翻訳されたのであるが、それらのほとんどが千数百年以上も経った現在にまで伝わっているのは、中国で大蔵経が編纂されたお陰である。中国の人々にとって仏教は未知の異文化であった。それ故、その多くの経典の全体像を把握するためには、まずそれらを分類整理しなければならない。そのためには経典の内容を知る必要がある。こうして経典の研究は進み、必要に応じて書写され、後にはまとめて印刷されるようになったのである。

中国で最初到大蔵経が印刷されたのは宋代の開宝年間であった。それ故、これを一般に「開宝蔵」と呼んでいる。この「開宝蔵」は平安中期に裔然によって日本にもたらされたが、藤原道長に献上された後法成寺と共に焼失してしまった。「開宝蔵」は日本のほか高麗・西夏・交趾（ベトナムのハノイ）などの周辺諸国にも賜与された。皇帝の命令を受けて製作されたもの（勅版）としての権威を持ち、偉大な中国文化の象徴として周辺諸国の人心

を収攬するのに大いに機能したのである。「開宝蔵」以降、宋・元・明・清の各時代にわたって、時の為政者によって作られたものや民間によって作られたものなど多くの版が存在している。それらは家系図のような複雑な関係を持っており、その全貌は簡単には掌握できないほどである。

現在、漢訳經典の大蔵經は、日本で大正年間に企画実行された『大正新脩大蔵經』が現実的には世界的な標準となっている。これは今ではインターネットの中にデータベース化され、用語の辞書など様々な付帯機能も付属し、検索などは一瞬でできるまでになっている。

本学所蔵の高麗版大蔵經について

この『大正新脩大蔵經』は、「開宝蔵」を覆刻した高麗版の大蔵經を底本にして必要な諸版や古写本を校勘したものである。高麗版大蔵經は、当初 1087 年に完成したとされるが、1232 年のモンゴル侵入に伴って焼失した。その後、仏力による怨敵退散を祈念



「高麗版大蔵經」
(大谷大学図書館蔵)

して再度大蔵經製作を企画し、1251 年に完成した。これを再雕本と称し、その版本約 80,000 枚が韓国慶尚南道の海印寺に現存し世界遺産となっている。

その再雕本は室町時代に盛んに日本に輸入された。その背景には倭寇によって拉致された朝鮮の人々の返還に対する褒賞、当時の李氏朝鮮が儒教国家で仏教を排したことなど様々な要因があったようである。少なくとも 50 蔵ほどが我が国に渡ったようであるが、現存するものは限られている。その代表的な 1 セットが本学図書館に収蔵されている。本学所蔵の高麗版大蔵經は、全部で 4,995 冊の高麗版が異版・写本などとともに十冊程度ごとに経箱に収められている。最新の研究によって本学所蔵の高麗蔵は、1381 年に印刷されて神勒寺に収蔵されていたものが、日本国王の求めに応じて 1414 年に譲与され、後に山口県の普光王寺に収蔵されていたのを、大内義隆が買い取って厳島神社に寄進したものであることが明らかになった。その後明治初年の廃仏毀釈によって、1874 年に東本願寺の所蔵となり、1962 年に本学の旧図書館の新築をきっかけに本学所蔵となったものである。

本学図書館は、この高麗蔵の他にも南宋・思溪版、明・嘉興蔵、清・龍蔵などの古版大蔵經を所蔵している。これら古版大蔵經を一部所蔵する大寺院は確かに存在するが、大学などの研究機関では本学のような例は他にない。そして、こうした原本の大蔵經は、江戸後期から明治初年にかけて東本願寺によって収集されたものとのことである。廃仏毀釈を始めとして、西欧の近代思想が隆盛していく中で、原典に基づいた仏教研究を進めて行こうという先学達の強い求道心と護法精神を感じずにはいられない。本学の根本精神である仏教を世の中に開放して行こうという願いはこのような点にも表れているように思う。